【水の限界】

沖縄県　鏡原（かがみはら）中学校　一年
砂川（すなかわ）　奈々夏（ななか）

「はい、休憩。」
その声と同時に、水筒を手に取って水を一気に飲み干す。部活のきつい練習が終わった後に飲む水は、とても美味しい。水筒の中の、水が無くなってしまっても、近くに冷水機があるから、すぐに冷たくてきれいな新しい水を水筒に注ぐことができる。
“これが当たり前”だと思っていた私の考えをくつがえす出来事があった。
ある日、テレビを見ていると、あるＣＭが流れてきて、お父さんが驚いた声で
「まって、今何時間って書いてあった。」
と言った。ふと見てみるとそれは、エチオピアに住む、私と同じ年の１３歳の女の子が朝早くから夕方近くまで、炎天下の砂漠の中で、水を汲みに行く様子とその時間が示されていたＣＭだった。その女の子が水汲みにかける時間はなんと１日８時間で、これを毎日毎日１人で汲みに行くというのだ。そこで私は衝撃を受けた。私達は普段、蛇口をひねれば簡単に水が手に入る。それに対し、何時間もかけないと水を汲みに行けない、という人達が世界にはまだまだたくさんいるのだ。
世界には、今現在も水不足で苦しむ人々が６億６３００万人もいる。それに加えその人達は、池や川・湖・整備がいき届いていないような井戸などから水を汲んでいる。その汚れた水が原因で、毎月８００人もの子供達が命を落としている。私がＣＭでみたエチオピアの女の子も、苦労して歩いても手に入るのは、１人あたりわずか５リットル未満の茶色い水のみなのだ。
今も昔も変わらず、水不足は深刻な問題である。
面積の約７割が水でおおわれていて、水の惑星と呼ばれている地球だが、その水もずっとある訳ではない。限りある資源なのだ。
あのＣＭも思い出して考えてみると、水を大切に、節水を心がけながら使っていかなければならない事が分かる。
そこで私は、身近な今住んでいる宮古島で水に関して行われていることを調べてみた。
昔の宮古島では、山のない地形と、浸透性の高い琉球石炭岩であることから、降って来た雨水は地下へ、ほとんどの水は海へ流れ出てしまう事に加え、干ばつ・台風などの天災がつねに同居するという悪影響が重なっていた事があり、長い間、水の確保に悩まされた時があったそうだ。昭和４６年には、百八十日間（半年）で降雨量１６２ｍｍという大干ばつに見舞われ、農業が主な宮古島は当時、大打撃を受けた事が分かった。
しかし、本土復帰を契機に、かんがい事業の実現のために、農家の人々が国や県などに働きかけ、そのおかげで今の宮古島にある“地下ダム”が完成したのだ。その地下ダムのおかげで、水を安定して確保することができ、農業も安定、発展していった。地下ダムのおかげで、今の私達が水に困って苦労することは無い。
今の充実した暮らしがあるのも、長年水不足に悩まされ続けた昔の人々のおかげであると考えると、とてもありがたく感じてくる。
だが、この地下ダムも永遠に続くものではなく、限りあるものだ。節水について自分達がすぐ実行できることを考えてみると、たくさんある。例えば、皿を洗うときは水を出しっぱなしにしない。油汚れはふきとってから洗うなどの方法がある。
私達の次の世代、そして未来にも、きれいで安全な水を受けついでいくためにも、水を大切にし、１人１人に出来ることをしていかなければならないのだ。